

# 四国におけるインバウンド観光客の観光行動分析

原 直行 (香川大学)

Keyword : 観光行動分析、GPS データ、インバウンド

## 【問題・目的・背景】

本研究の課題は、観光情報アプリを活用したGPSデータの分析から、自治体、DMO等の観光振興施策に観光情報をどのように生かしたらよいかを明らかにすることである。

近年、インバウンド観光客の日本の訪問は3,000万人を超え、2019年のラグビーワールドカップ開催、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催等もあって、今後も一層増加することが予測されている。その一方で、インバウンド観光客の観光行動は極めて重要なながらその実態はつかみにくく、国土交通省観光庁観光地域振興課(2015)などの先駆的な研究があるにすぎない。インバウンド観光客の周遊ルートや訪問した観光地、宿泊先を知ることなどにより観光行動をつかむことは、より効率的な観光プロモーション等の戦略策定・実施につながるであろう。

## 【研究方法・研究内容】

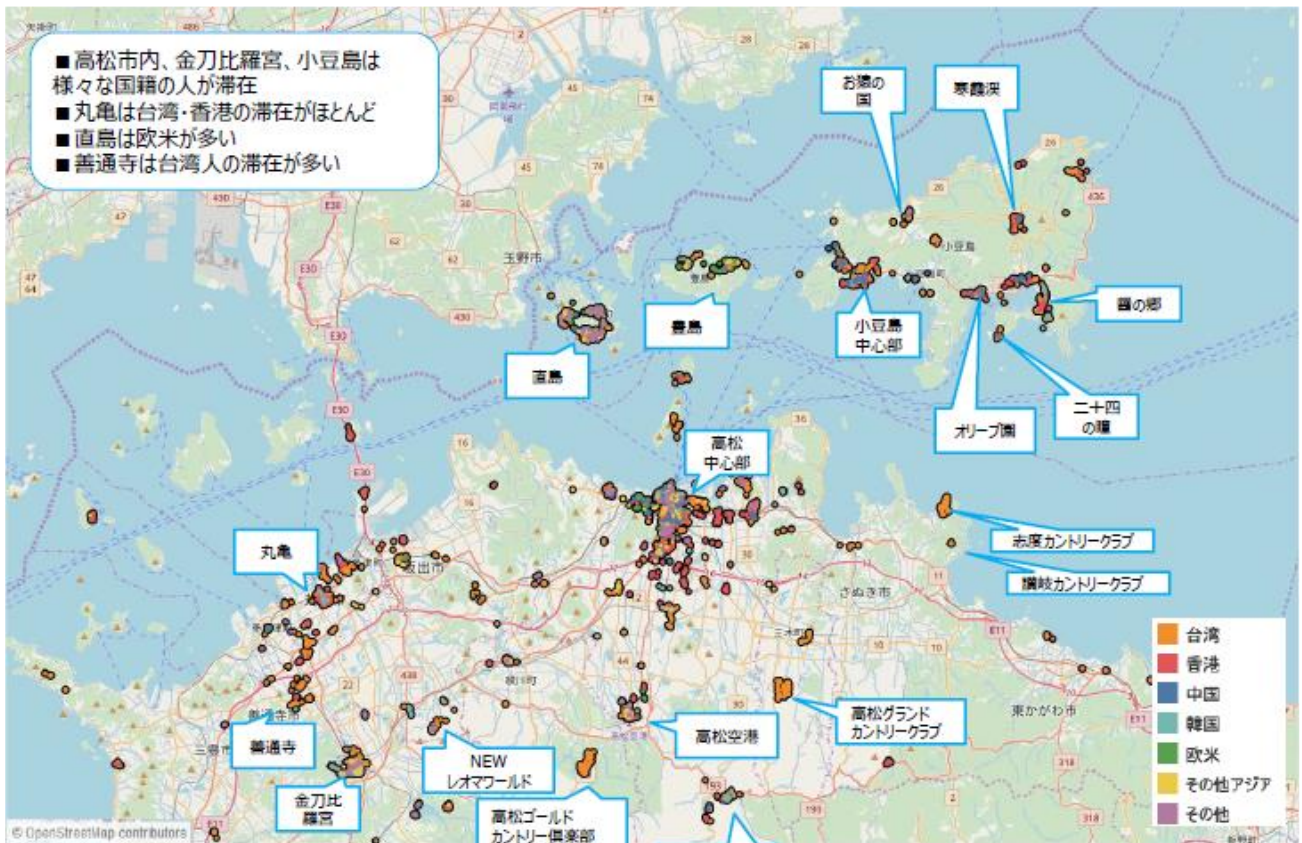
株式会社NTTアドの協力を得て、観光情報アプリ「Japan Travel Guide」をダウンロードしたインバウンド観光客

の周遊の実態をGPSデータの分析から明らかにする。これは観光情報アプリのダウンロード時に簡単なアンケート(年齢、性別、国籍、同行者数、旅行タイプ等)に回答してもらい、旅行時の観光行動をGPSデータから分析することで、訪問客数、訪問施設、宿泊施設、観光ルート、ハブ等の周遊ルートがわかるというものであり、それにより国別、季節別、年齢別、旅行タイプ別の類型化が可能となる。なお、インバウンド観光客は全国を周遊するが、今回の分析は四国、なかでも後にみるように、四国の観光のハブ的存在である香川県を中心に周遊した観光客を対象とする。

## 【研究・調査・分析結果】

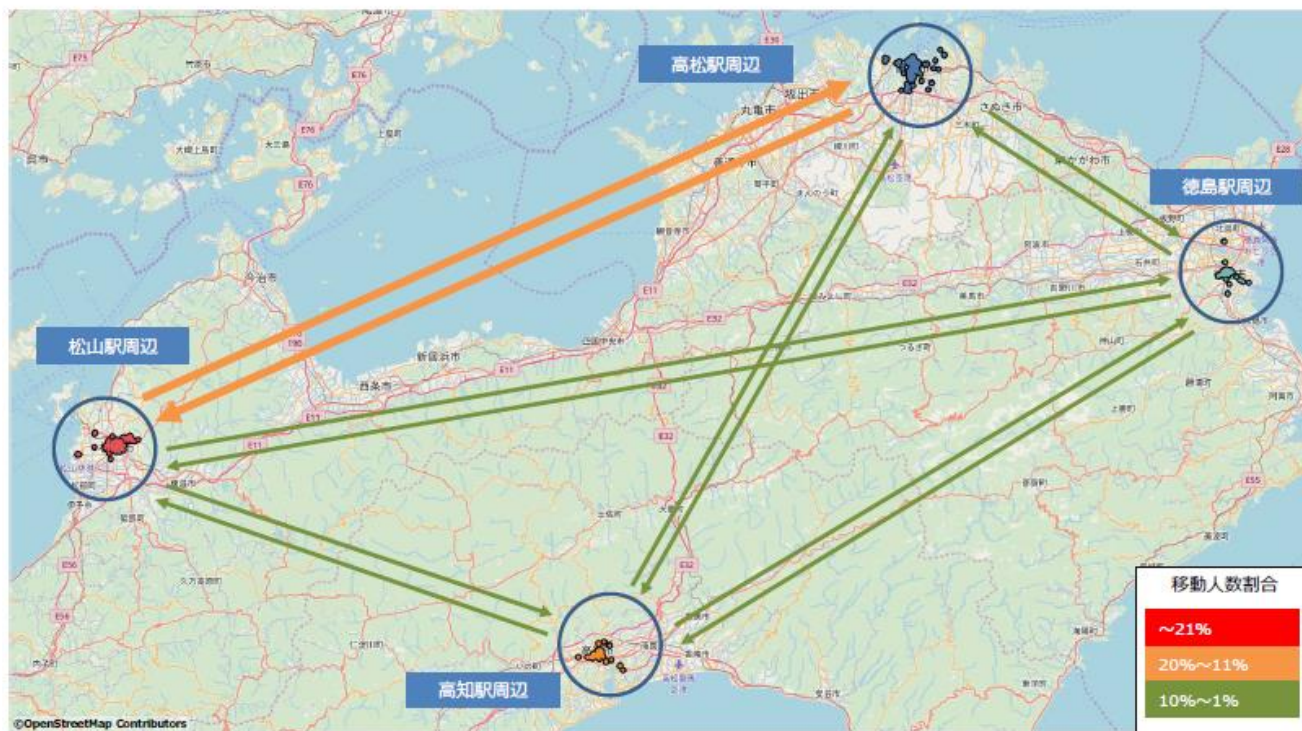
調査対象者は2017年4月1日~2018年3月9日の期間に四国を訪れた外国人のうち、四国での訪問期間が31日以内であった762人である。属性をみると、性別は男性48%、女性41%、不明11%であった。国別では台湾46%、香港21%、韓国8%、中国8%の順で多かった。観光白書

第1図 インバウンド観光客の主な滞在地



## 第2図 インバウンド観光客の主要駅周辺の立寄り情報

対象：2017/4/1～2018/3/9の期間に四国を訪れた外国人(ただし四国での訪問期間が31日以内の者)のうち、2ヶ所以上の主要駅周辺に位置情報がある者（523人）



(平成30年度)によると、四国の2017年の外国人延べ宿泊者の国別割合では、台湾27%、香港18%、中国16%、韓国11%となっているため、台湾、香港では比率が高めに、韓国、中国では低めになっている。中国年齢別では20代12%、30代26%、40代22%、50代19%、60代9%であった。30代を中心に20代から60代まで幅広い年齢層からなっている。旅行タイプでは個人旅行73%、団体旅行9%、不明12%であり、大部分が個人旅行である。

主要な分析結果は以下のものであった。

### ①滞在地分析

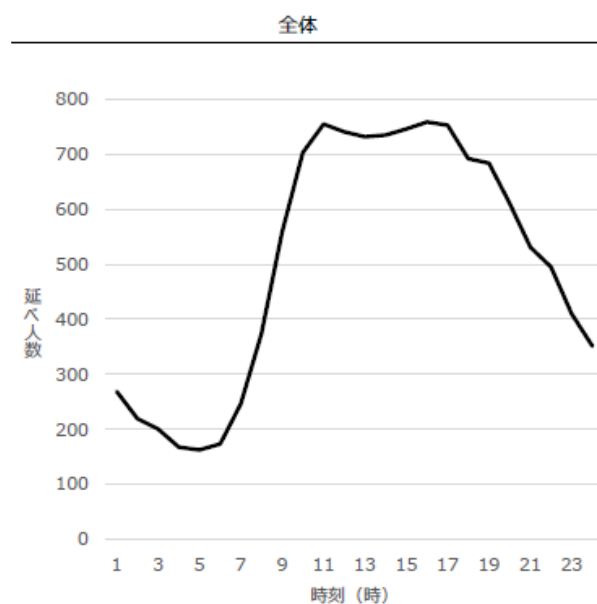
第1図はインバウンド観光客の主な滞在地をみたものである。(以後の図もすべて株式会社NTTアドから提供を受けたもの) これによると、高松市内、金刀比羅宮、小豆島は様々な国籍の人が滞在しているのに対して、直島、豊島では欧米人の滞在が多く、丸亀は台湾・香港の滞在がほとんどである。これらのインバウンド観光客の多い地域ではどのような情報発信を行っているのかを調べることによって、観光客の多い地域・施設の情報発信方法を他の地域・施設でもプロモーションに応用できる。また、人気地域・施設と連携したプロモーションもできる。

### ②立寄り分析

第2図は四国を訪れたインバウンド観光客のうち、2ヶ所以上の主要駅周辺に位置情報がある観光客の立寄り

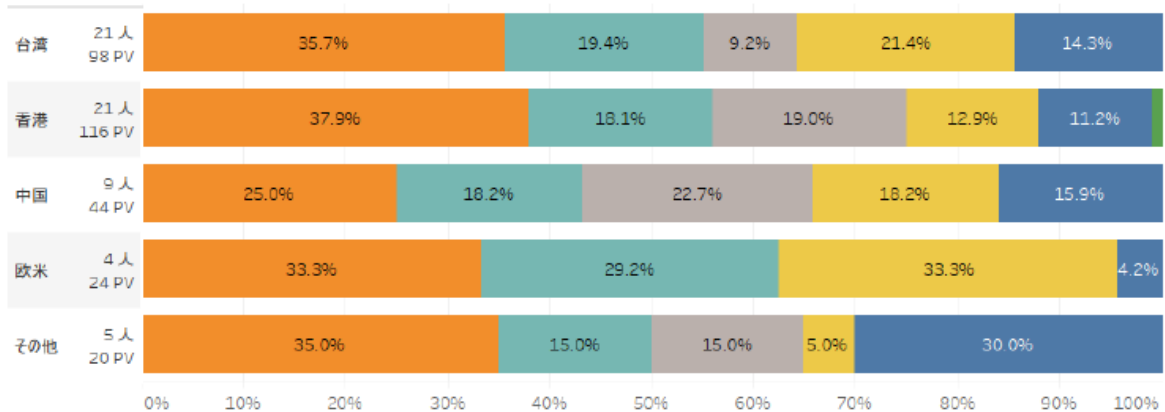
情報をみたものである。これによると、四国への流入は高松駅あるいは松山駅が多い。流出についてはほとんど高松駅からとなっている。また、高松—松山間を往復している観光客が多い。高松(香川県)が四国旅行のハブとなっていることがわかる。香川県にとって県外のプロモーションについては、愛媛、徳島、高知の各県と連携した四国周遊型観光が有効である。

第3図 香川県の時間別滞在人数



#### 第4図 観光情報アプリ内のコンテンツ別閲覧数

対象：2017/4/1～2018/3/9の期間に四国を訪れた外国人のうち、四国での訪問期間が31日以内の者（762人）  
 ※コンテンツを閲覧した人数が3人以上の国のみ表示



注：左から「遊ぶ」「見る」「食べる」「買う」「体験する」「公共施設」

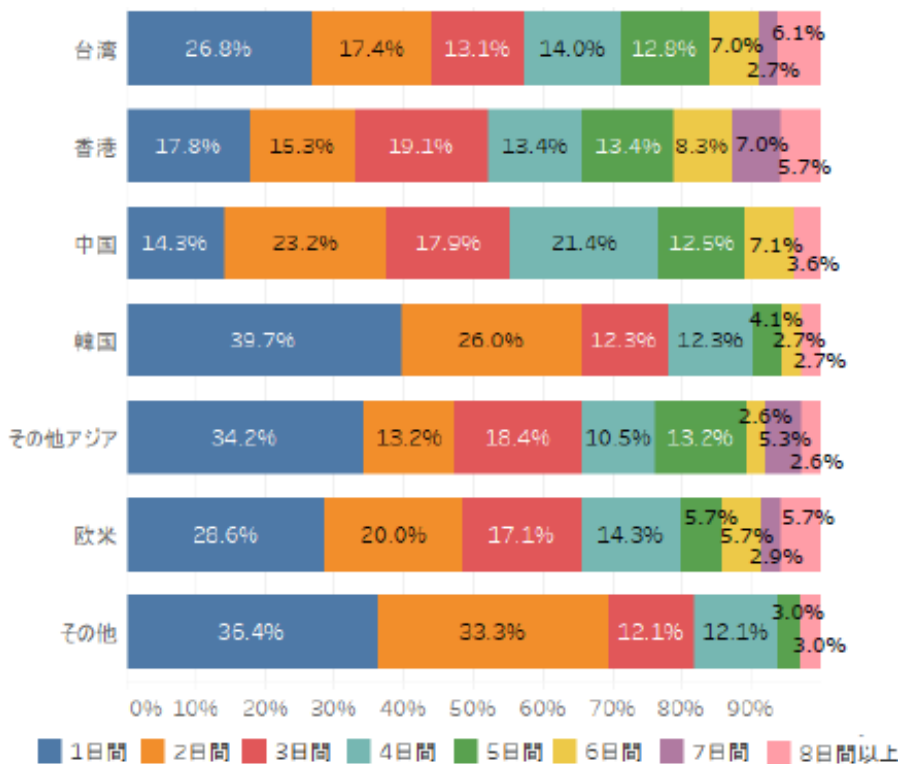
#### ③流出入分析

第3図は香川県の時間別滞在者数をみたものである。これによると、他の四国の各県と比べて香川県は昼間の滞在率が高く、夜の滞在率が低い。また、図示は省略するが、香川県への流入は隣接している岡山、愛媛、徳島の各県からが多い。香川県で夜も滞在し、宿泊してもらうためには、夜型観光のコンテンツ充実が求められる。

#### ④コンテンツ分析

第4図は観光情報アプリ内の観光コンテンツ別閲覧数をみたものである。これによると、観光情報アプリ内の観光情報のうち、「遊ぶ」の閲覧がどの国でも最も多く、次いで「見る」、「買う」が多い。そのため、情報発信の内容は「遊ぶ」のコンテンツを充実させることが効果的である。

#### 第5図 四国での訪問日数



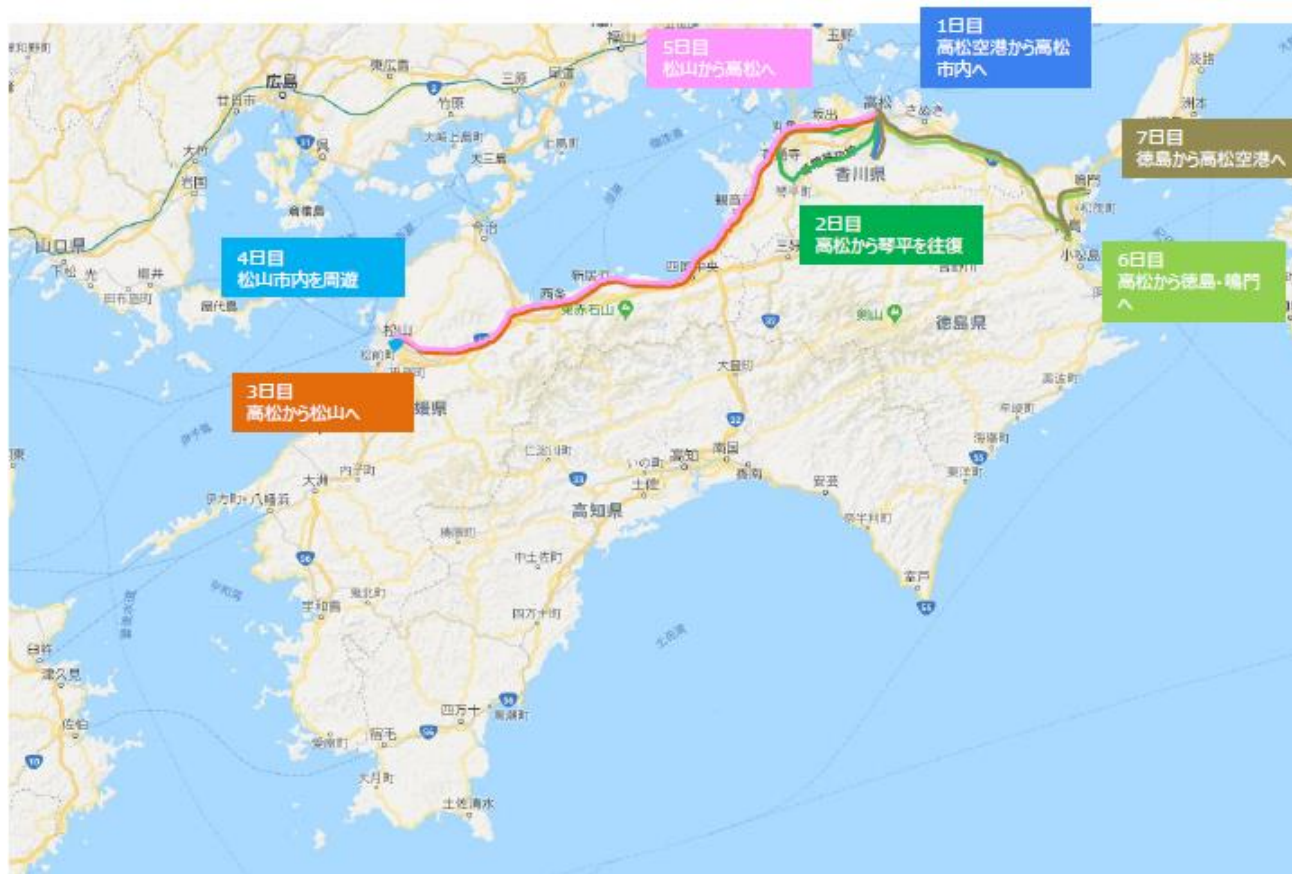
#### ⑤旅程分析

第5図は四国での訪問日数をみたものである。これによると、1～2日滞在が一番多いが、5日間滞在まではどの国も比較的多い。また、図示は省略するが、国別の平均訪問日数では、アメリカ（5.44日）が最も多く、次いでドイツ（5.00日）、香港（3.81日）、中国（3.77日）、イギリス（3.60日）、台湾（3.44日）の順となっている。

#### ⑥回遊・動向分析

第6図は「ALL SHIKOKU Rail Pass」を保有している外国人の周遊事例をみたものである。インバウンド観光客は、電車移動できる範囲での移動が多い。また、1日の移動距離は長く、2県にまたがって移動することが多い。

第6図「ALL SHIKOKU Rail Pass」保有外国人の周遊事例



#### 【考察・今後の展開】

これまでの分析から、香川県については、以下の政策的インプリケーションが引き出せる。①県内のプロモーションについては、観光客の多い地域・施設の情報発信方法を他の地域・施設でもプロモーションに応用できる。また、人気地域・施設と連携したプロモーションもできる。②県外のプロモーションについては、愛媛、徳島、高知の各県と連携した四国周遊型観光、さらには対岸の岡山県と連携した観光プロモーションが有効である。③県内滞在日数を伸ばすことについては、5～6日間の滞在プログラムを作り、滞在日数を増加させる工夫が必要であり、そのためには体験型観光のコンテンツを充実させ発信する、特に夜型観光のコンテンツの充実が求められる。

最後に観光情報アプリ分析の限界について指摘したい。なぜその観光地を選んだのか、その観光地をどのように評価したのか（満足度）、滞在中にいくら費用を使ったのかなどについては、観光情報アプリからは分析できない。そのためアンケート調査やテキストマイニング分析などによって補う必要がある。

#### 【引用・参考文献】

- ・相原健郎 (2017) 「ビッグデータを用いた観光動態把握とその活用—動体データで訪日外客の動きをとらえる—」『情報管理』vol. 59 no. 11
- ・株式会社 NTT アド (2018) 「ALL SHIKOKU Rail Pass×Japan Travel Guide 訪日外国人周遊分析報告書 (2017)」
- ・国土交通省観光庁観光地域振興課 (2015) 「平成 27 年度 ICT を活用した訪日外国人観光動態調査事業実施報告書 (概要)」
- ・宮野幸岳 (2017) 「観光地域づくりの施策検討ツールの開発に関する研究—観光ビッグデータによる実証的解析を通して」『大分県立芸術文化短期大学 研究紀要』第 54 巻